校長室だより～燦燦～ №９６２

がんばる

2024.2.3

がんばっている教員がいる。努力している教員がいる。だが、教員の場合、がんばったからいいわけではない。努力したから評価されるわけでもない。問題は、その中身や質である。

一般に、がんばること、努力することはいいことだと思われている。努力しないよりは、したほうがよい。もしかしたら、がんばっている、努力していることで、自分を正当化しようとしていることはないだろうか。時間をかければかけるほどいいことだという考えはないだろうか。どんなに努力しても、進むべき方向が違っていては効果は上がらない。時間＝労力という時代ではない。

いい努力について書いた本がある。筆者は、その特徴を次の７つにまとめている。

① 「成果」につながるもの

② 「目的」が明確なもの

③ 「時間軸」を的確に意識しているもの

④ 「生産性」が高いもの

⑤ 「充実感」を伴うもの

⑥ 「成功パターン」が得られるもの

⑦ 「成長」を伴うもの

努力は、必ずしも成果を約束するものではない。教員の世界では、よくあることである。やっているうちに、毎年同じようなことを繰り返しているうちに、何のためにその取組をしているのか、その目的がわからなくなってしまうことがある。そのうちに、目的を見誤ってしまうこともある。

がんばりや努力には、それを実現するための時間を計算に入れておかなければならない。時間は際限なくあるわけではない。生産性がむずかしい。教員の場合は、効率第一でいくと、うまくいかないことがある。しかし、より短い時間と小さな労力で高い成果を出すことができれば、その方がよい。ポイントとタイミングの問題である。

充実感、これがこれからのキーワードである。やりがい、働きがいと言ってもよい。必要のないことに時間をとられ、充実感を得られないような取組をなくしていきたい。やっていることに、手応えがあるようにしたい。

がんばった分、努力した分だけの成功体験が蓄積されていくと、それが身体化されていき、次の機会に生かされていく。そして、自分の成長を感じることができるようになっていく。その成長は、自分が所属する組織の成長をも促す。

教員に限った話ではないが、がんばっても、努力しても、うまくいかないことはよくある。自分のがんばりや努力を冷静に分析しなければならない。こういったことが、これからの働き方に求められている。